

## 図書紹介

C. D. Cowan (ed.): *The Economic Development of South-East Asia*, George Allen and Unwin Ltd, London, 1964. 192p.

ロンドン大学の School of Oriental and African Studies が、かつての外国学校から、discipline 重視の地域研究的な性格にきりかえられて以来、専門的立場からする東洋・アフリカ研究がいちじるしく発展している。

そのひとつとして、1959年以来、フォード財団の援助のもとに、東南アジア史担当のコーウェン教授が中心となって、東アジアおよび東南アジアの経済史研究プロジェクトがすすめられている。1961年7月、アメリカ・ヨーロッパ・アジアから、この問題の専門家を招き、国際シンポジウムをもった。その成果が、*Studies on Modern Asia and Africa* の第3号として出版された本書であり、また第4号として同時に刊行された *The Economic Development of China and Japan* である。

この研究計画は、東および東南アジアの近代史研究において経済史的側面が重要であるにもかかわらず、ともすれば軽視されたこと、あるいは西欧帝国主義の名のもとに、つっこんだ分析がされなかったことの反省にたつ。したがって、じみに近代経済史を分析しようとする。

本書は、コーウェン教授の東アジアおよび東南アジア経済史の簡単だがきわめて興味ある概説からはじまる。それにつづいて収められている論文はつぎの8。

J. Leighton-Boyce 氏の *The British Eastern Exchange Banks: An Outline of the Main Factors Affecting their Business up to 1914*.

リバプール大学の Francis E. Hyde 教授の *British Shipping Companies and East and South-East Asia, 1860-1939*.

シェフィールド大学の Charles A. Fisher 教授の *Some Comments on Population Growth in South-East Asia, with Special Reference to the*

*Period since 1930*.

ロンドン大学の J. A. M. Caldwell 講師の *Indonesian Export and Production from the Decline of the Culture System to the First World War*.

ノース・カロライナ大学の James C. Ingram 教授の *Thailand's Rice Trade and the Allocation of Resources*.

シンガポール大学の Wong Lin Ken 講師の *Western Enterprise and the Development of the Malayan Tin Industry to 1914*.

ノーザン・イリノイ大学の J. Norman Parmer 教授の *Chinese Estate Workers' Strikes in Malaya in March 1937*.

ロンドン大学の T.E. Smith 氏の *Immigration and Permanent Settlement of Chinese and Indians in Malaya: and the Future Growth of the Malay and Chinese Communities*.

わたくしにとっては、「東南アジア地理」の著者フィッシャー教授の東南アジアの人口史、また「タイ経済発展」の著者イングラム教授のタイ米穀の輸出史、この二つの論文から、とくに教えられるところが多かった。いずれも、データをよく駆使したすぐれた分析である。

しかし、個々の論文はそれぞれ学問的に貴重であるが、それとは別に興味のあるのはコーウェン教授が Introduction において、なぜ日本だけが東および東南アジア諸国の近代史において、経済の急速な近代化なり発展なりを行なったかが、シンポジウムの中心問題であったとされているところである。とくに、わたくしの目下の関心点のひとつであるタイと日本との比較がおもしろい。タイが1855~1868年、モンクー国王のもと、米輸出でもって国際貿易に積極的に参加した。この initial stage は日本とはそうちがわなかったのに、なぜ、これにつづく発展がタイにおいて行なわれなかったか。シンポジウムでは3点が指摘されたという。第一は、政治的には独立国ではあったが経

済的には colonial type であったこと、第二は、人口増加率が日本よりはるかに高かったこと、しかも第三に気候的要因が経済人としての活動を阻害しているのではないかとのこと。いずれも示唆にとむ見解だと思われる。

わたくしは、本書の価値はもちろんだが、こうしたシンポジウムが開催され、その成果が出版されたそのことを高く評価したい。(本岡 武)

**Maung Maung: A Trial in Burma, The Assassination of Aung San, Martinus Nijhoff, The Hague, 1962. vi+117p.**

ビルマで7月19日は Day of Martyrs, 1947年のこの日に暗殺されたオン・サンを国をあげて追悼する。1961年のこの日、たまたまシャン州の首都タウンジーに滞在していたわたくしは、グラウンドに市民・学生生徒が集まって静かにオン・サンをしのぶ大集会に出席し、強い感銘をうけたことを思いだす。政府のオフィスは、ときの大統領や首相の写真がかかかなくても、必ず軍装のオン・サンの肖像がかかっている。まさに、オン・サンは建国の父として永遠に追憶的となっている。

このように神格化されているのは、かれがビルマ建国にはたした役割による。しかし同時に、齢わずかに32才、ビルマ独立に先だつ半年前、ラングーン総督府の一室で、かれの新閣僚たるべき同志と会議中、かつて首相の経験のあるウ・ソーの一味によって、白昼殺されたという、ビルマ近代史上最大の悲劇にもよるであろう。

現在ビルマのすぐれた法律家であり、また Burma's Constitution, Burma in the Family of Nations などによって、ビルマ問題の著作家として世界的に知られているモン・モン博士が、ウ・ソー一味の裁判記録をもととして、オン・サン暗殺事件の経過を明らかにした。この事件は、ビルマの政治過程を理解するひとつの鍵であるだけに、いまここに客観的に事件の経過を裁判記録にもとづいて分析された本書のもつ意味は大きいと思われる。

本書は裁判記録を第3章以下にあて、第1章はオン・サン、第2章はウ・ソーの略歴にあてている。オン・サンのことはよく知られているが、ウ・ソーはあまり

知られていない。戦争前に首相となり、勃発直前ロンドンに独立交渉にわたり、勃発とともにイギリスによってアフリカで抑留、終戦後ビルマに帰り、ついに死刑に処せられたウ・ソーの数奇な運命を見ても、また、なぜかれがオン・サンを暗殺することによって政権がとれるとイージーに考えたかということを見ても、つくづくビルマの政治構造だけでなく、ビルマ人そのものの personality や behavior を考えさせられる。政治問題には素人であるわたくしにとって、本書は推理小説のおよびもつかない迫力をもっている。まさに事実は小説より奇なりだ。

わたくしは、著者モン・モン博士をエール大学にたずねたことがあるが、博士はちょうどこのとき visiting lecturer としてのニュー・ヘブンの研究生活を利用して本書を執筆されていた。博士のラングーンにおける生活を思うとき、交換教授としての生活で本書を書きあげたことを喜びたいと思う。(本岡 武)

**Atlas of South-East Asia, Djambatan, Amsterdam, 1964. 84p.**

東南アジアのまとまった地図帖は、東南アジア研究者の間に渴望されていた。東南アジア全域についてはもちろんのこと、各国別の地図帖も初等・中等教育程度以外のものは全然刊行されていない。唯一の例外は、戦争直前インドネシアについてまとめられた *Atlas van Tropisch Nederland*, Topographischen Dienst in Nederlandisch-Indië, Batavia, 1938 だけである。(この熱帯蘭領地図帖は、かなり古くなっているが、今日においても最高水準をゆくものであることを付記しておきたい。)

このたび、*Atlas of the Arab World and the Middle East* を刊行したアムステルダムのジャムバタン社より、これと同じ種類の地図帖が東南アジアについて刊行されたことは、まことにありがたい。

本地図帖のサイズは 25×35cm。表紙と裏表紙の見開きに、東南アジアの歴史地図が8図に収められている。主要なのは5色版で60ページにわたっての東南アジア全域・フィリピン・インドネシア・シンガポール・マラヤ・タイおよびインドシナ3国のそれぞれについての、一般図としての地形図のほか、特殊図としての気候・植生・地質・土壌・政治・人口・民族・土地